

日本語の文法理論から見たモンゴル語助詞の記述的研究

教科・領域教育学専攻

言語系(国語)コース

M O 9 1 2 3 H

蘇 樂 吉 瑪

本論文は、日本語の格助詞に関する研究成果を踏まえ、現代モンゴル語の格助詞ならびに人称所属助詞の実態を記述することを目的とする基礎研究である。

本論文の全体の構成は次の通りである。第1章では、理論的枠組みとして、日本語の格助詞の認定に関する諸説を検討する。第2章では、日本語の格助詞における意味役割を調査し、どのような形態格がどのような意味役割を担っているかを記述する。第3章では、第2章における日本語の意味役割をモデルにして、モンゴル語における格と意味役割の関係を明らかにする。第4章では、日本語研究における「所有傾斜」という知見を援用して、モンゴル語の人称所属助詞に見られる所有傾斜について分析する。以下に、各章の概要を示す。

第1章：理論的枠組み

この章では、格について一般言語学的な観点から表層格と深層格を記述することで、理論的基盤を整える。第1節で格という概念について、表層格(形態格)と深層格(意味役割)の下位区分に基づいて、両者の基本的性質を確認する。第2節では、日本語研究における格助詞の認定に関する諸説を概観し、学説史に様々な立場がある中で、現在の文法研究で

は、文法的な機能によって認定する立場が主流となっていることを見る。その上で、本論文では、(1)名詞に付くことと、(2)連用関係を示すことに大きな特徴を認め、文法理論に立脚することとする。第3節では、格助詞の認定に関して扱いが難しいと思われる助詞「まで」を取り上げ、[i]名詞に付く、[ii]連用関係を示す、[iii]他の助詞で代用できない、[iv]文法化の度合いに程度さを認める、という4つの観点から助詞「まで」を格助詞と扱うものとする。第4節は、分析上の方法論に言及し、文構造に4つのレベルとして、①意味役割、②格関係、③文法関係ないし統語機能、④情報構造を区別した上で、本論文では、①意味役割と②格の間で議論を進め、③文法関係や④情報構造には触れないことで、用語法の混乱を避ける意図を確認する。

第2章：日本語文法における意味役割

第2章は、日本語研究の成果をベースに、日本語における格(形態格)と意味役割(深層格)の関係を具体的に記述する。「意味役割」は、名詞句が文中で担う意味的な関係を表す概念であり、第1節で、意味役割に関する一般的な特性を振り返った上で、第2節において日本語の格に認められる意味役割を先行研究から記述的に整理する。第2節では、現代

日本語の形態格のうち、「ガ格」「ヲ格」「ニ格」「カラ格」「デ格」については言語学における先行研究が蓄積されているため、これを援用して意味役割を記述し、それ以外の「ト格」「ヘ格」「マデ格」「ヨリ格」については、専門論文がないため、国語辞典・文法事典等を利用して意味役割の記述に努めた。これを、モンゴル語の格助詞の意味記述に対する対照資料とし、次章で再び取り上げることとした。

第3章：モンゴル語の格と意味役割

第3章では、第2章で見た日本語研究の知見を踏まえ、モンゴル語の格と意味役割を記述する。第1節でモンゴル語の格助詞(格標識)を概観した上で、第2節から第10節にかけて9個の格について、格助詞ごとに意味役割を記述した。これにより、モンゴル語の格助詞に対して意味役割レベルでの包括的な記述ができ、日本語の格助詞との異同が分かるようにした。第11節で、モンゴル語における格助詞と意味役割の分布を整理した。

第4章 モンゴル語の所有傾斜

第4章では、現代モンゴル語において「人称所属助詞」と呼ばれる助詞の用法が「所有傾斜」の階層とどのように関連するかを検討し、オリジナルの「所有傾斜」と異なる序列が見られることを示すものである。現代モンゴル語の「人称所属助詞」は、名詞の後ろに膠着する不変化詞で、-min(私の)、-chin(貴方の)、-ni(彼の/彼女の)3つがあり、この助詞によって、名詞が表わす対象の「所有者」が標示される。一方、「所有傾斜」とは、所有者と所有物の間の心理的距離を階層化したもので、日本語の尊敬語化に反映されることが

知られている。本章では、現代モンゴル語の「人称所属助詞」が、多くの部分においてオリジナルの「所有傾斜」に従いつつ、一部にオリジナルの順列と異なる振る舞いを示すことを例証した。

第5章：結論

本論文での成果は、大きく2つの点が挙げられる。1つ目は、日本語の格に関する研究成果を踏まえて、モンゴル語の格助詞を理論的・記述的に分析したことである。本論文では、格助詞に関して多くの先行研究が蓄積された日本語研究の知見を踏まえ、一般言語学的に汎用性のある意味役割(深層格)という概念を中心に、格助詞(形態格)を記述することであり、これにより、文法関係と形態格の混同を避けるとともに、用語法に関して一貫性を保つことができたものと思われる。

2つ目は、モンゴル語に特徴的な人称所属助詞に関して、その用法上の制約を所有傾斜という観点から分析したことである。モンゴル語の人称所属助詞について、日本語研究から生み出された所有傾斜という概念を適用し、人称所属助詞の使用条件に(所有傾斜という)明示的なガイドラインを示すことで、人称所属助詞を使える範囲と使えない範囲を(連続性を持ちながら)モンゴル語学習者が理解するのを支援するものになったと思われる。

主任指導教員 菅井三実
指導教員 菅井三実